

383 中央大学辞達学会

〔『法学新報』第25巻1（282）号 大正4年1月1日〕

○中央大学辞達学会 中央大学辞達学会は去十二月六日を以て  
都下各大学専門学校学生連合演説会を開催せり当日は所謂中央  
大学の演説会に附物なる雨天なりしも聴衆統統押寄せ開会の時

は既に堂に満つ午後一時十五分堀江副会長開会の辞を述べ演説の弥次に付き警告を加ふ次で先頭第一に馬を陣頭に進めたるは農業大学の久保田峻君なり君は「農村問題は根本的改革を要す」と題して我国の法定地価の乱雑を極むる所より立論し進て農村の問題の根本的改革の第一著歩として現状の打破を叫んで降壇次に起ちたるは日本大学の勅使河原一郎君なり君は「亡国の印象と国民の覚悟」と題す蓋君は有数なる学生弁士中の美男子五ツ紋の瀟洒たる風采先つ場を圧す君は慷慨的口吻を以て現時の事局を論し帝国の外交に及び国民の覚悟に論及して降壇次に「吾人の使命」と題して明治大学の下村茂君起ち一種特色ある声を以て現時の事局に処する最緊要事は国家経済の独立を計るにあるを論して降壇次には「与論の進化」と題して高師の深田栄次郎君起つ君は説明的口調を以て与論の本質を論し進んで与論の指導方法に及ふ次に一高の高野操君「Love & Justice」と題して潤みある声と稍牧師の説教的語調を以て人生の無常を論し神の愛を讚美し更に現時の道義の頽廢せることを痛論す弁舌最も抑揚に富み又修辞形容甚た到れり次に高商の平野安平君起つ「落穂」と題す所論縦横捕捉しかたし、次に法政大学の平野義郎君「此国家政策をみよ」と題し現時の我帝国の政策を縦横に批評して自家独創の立国政策を提唱す満堂嘩然唯君の態度が稍急き込み過ぎたるは恨むへし次に専修大学の山口政市君「世襲華族破壊論」を提げて壇に上る語調生彩を欠くの感ありしも醇醇として我国の社会組織の一部改造の必要を説くは可し次に「新興文明の揺籃中より」と題して慶応大学の林要三

君起てりキビキビしたる口吻を以て新興文明を論し大和民族の当に建設すべき文明の内容に論及して降壇次に本会副会長高崎介蔵先生破るるか如き拍手に迎へらて壇に起ち先生独特の諧謔と皮肉を含める弁舌を以て興味深き頼山陽に関する説話を試みらる次に早稲田大学の園田孝一君起ち「吾国民性と憲政の将来」と題して朗朗の弁舌を振ふ君は尾崎行雄氏の言に依り例を英国に取り我国民の憲政の訓諫(續)なきを痛論す次に「天籟の響」と題し東洋大学の隈部翠星君壇に起ち感情に激せる口調を以て涸渇せる現代に真理の光を提示せんとすることの心懐を述べ信仰の力の至要一義を提唱す弁熱するに及び声涙並下る次に本学釣谷安二君「人の力」と題して所論縦横法制問題に入りて議論詳密を極む最後に副会長堀江専一郎先生閉会の辞に代へ本日演題「君子自重せよ」の内容梗概を述べられ国民の道義の念薄きを慨嘆せられ暫くも真君子の偽君子と交る事を避け所謂偽君子を社会より撲滅せしめさるへからさることを痛論せらる斯て其閉会したるは午後七時、夫より晚餐会を食堂に開き弁士諸君の熱心なる「テーブルスピーチ」と興味ある隠芸ありて散会したるは九時頃なりき当日会長花井博士は政事界多端の爲め又華山茅原氏は差支の爲めに出席せられさりしは遺憾なりき

(委員報)